

# 発達障害児の他者の要求を充足するスキルの促進

—刺激等価性の視点から—

藤金 倫徳

(福岡教育大学特別支援教育講座)

発達障害 要求充足行動 刺激等価性

## I. 目的

障害のある子どもの指導では、正の強化刺激の獲得確率を高めることが重要な視点の一つであり(望月, 1993)、要求言語の指導が多く行われてきた(藤金, 2001)。それと同様に、特に軽度の発達障害の子どもの場合には、援助行動(松岡他, 2001)や要求充足行動(藤金, 1999)など、他者に強化刺激を提示する行動の促進も重要だと考えられる。このような行動を示すことで、他者から汎用強化刺激を得ることができる(松岡他, 2001)ことにとどまらず、自己が要求者になった場合の他者の要求充足行動の生起確率も高まることと予測されるからである(藤金, 1999)。

本研究の対象児は、他者の玩具の要求に対して、「だめ」「待って」などと、それを拒否することが多かった。日常では、これらの反応に対しては、保護者は叱る等のことを行っていたが、改善はほとんど見られなかった。拒否は当該の玩具での遊びの継続によって強く強化されていることが考えられた(藤金, 1999)。

本研究では、その改善の方法として、刺激等価性の枠組みの適用を検討することを目的とした(Fig. 1)。A→Bは成立しているの、C→Bを訓練すれば、A→CおよびC→Aの成立が予測される。その状態でCに対してBではなくDを統制させる訓練を行えば、A→C→Dという経路でA→Dが成立するのではないかと考えた。

## II. 方法

### 1. 対象児

対象児はインテーク時5歳1ヶ月(WPPSIの結果は、PIQ120、VIQ87、FIQ104)の男児であった。2歳2ヶ月時に医療機関で広汎性発達障害の診断を受けた。落ち着きがなく、他者との関わりが一面的である、攻撃行動が出現する、感情のコントロールが困難である、一番にこだわる等が保護者より報告された。指導場面においてもこのような傾向が見られ、玩具を他者が要求しても、それを拒否し、子ども同士の場面では、喧嘩になることが多かった。

### 2. 手続き

訓練は原則週1回約40分行った。訓練室内には玩具(ベイベレード、ラジコンカー、ラジコンヘリ等)を用意し、訓練者と対象児はそれで遊んだ。玩具を操作していない者は、一定のタイミングで交代を要求した(例えば、墜落時)。正反応は、訓練者が交代を要求した際に、対象児が玩具を渡すことと定義した。訓練は対人間の多層ベースライン法を用いた。なお、同一の訓練日ではあっても中盤で条件を変更することがあり、その際には別のセッションとしてFig. 2には示している。

一連の手続きは保護者に説明し、同意を得ている。

1) ベースライン測定および他の現実場面での測

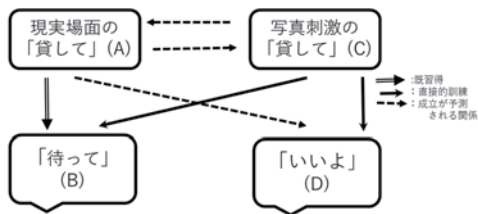


Fig. 1 訓練のパラダイム

定: 前述した設定で、対象児が玩具で遊んでいる際に、大人は「貸して」と交代を要求した。子どもが交代を拒否した際には、数回「貸して」を繰り返し、それでも交代できなければ、次の交代のタイミングまで待った。

2) 「「待って」集中訓練」: 大人が子どもに交代を要求している場面の写真(吹き出しで「貸して」を印字)を机上で提示した。子どもには「待って」を自発することを求めた。

3) 「「いいよ」集中訓練」: 「「待って」集中訓練」と同じであったが、子どもに求めたのは「いいよ」を自発することであった。

## 3. 評価

VTR録画された訓練場面を、2名の評価者で、正反応が生じたか否かについて、100%一致するまで評価を繰り返した。

## III. 結果および考察

結果は、Fig. 1に示すとおりであった。

第1層では、正反応が20から30%程度であった。

次の「「待って」集中訓練」では、その後の現実場面での正反応率の低下が予測されたが、結果は逆に若干高まった。このことはAとCの間の関係が成立していないことを示している。そのため、現実場面において集中訓練で用いた写真刺激を提示し「待って」の生起を促すと同時に再度集中訓練を行った結果、正反応率が0%となり、AとCの間の関係が成立した。その後「「いいよ」集中訓練」を行ったところ、現実場面での正反応率が大きく高まった。

一方第2層の9セッションの正反応率は53.8%であったが、10セッションでは100%であった。ただしこの10セッションは、5試行しか設定できず、また、正反応が高かった玩具での遊びを対象児が選択したことが影響している。集中訓練後には高い正反応率を維持しており、手続きの有効性がうかがえた。集中訓練は、8と12セッションの直前のみであり、迅速な行動変容だと言える。

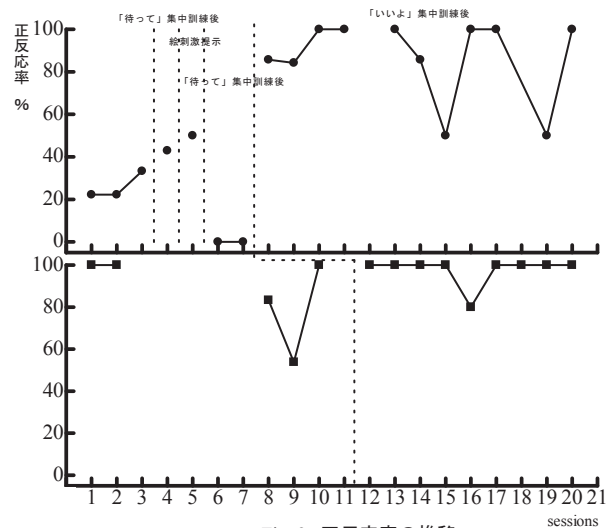


Fig. 2 正反応率の推移

(FUJIKANE Michinori)